

もう1つの「田園交響曲」

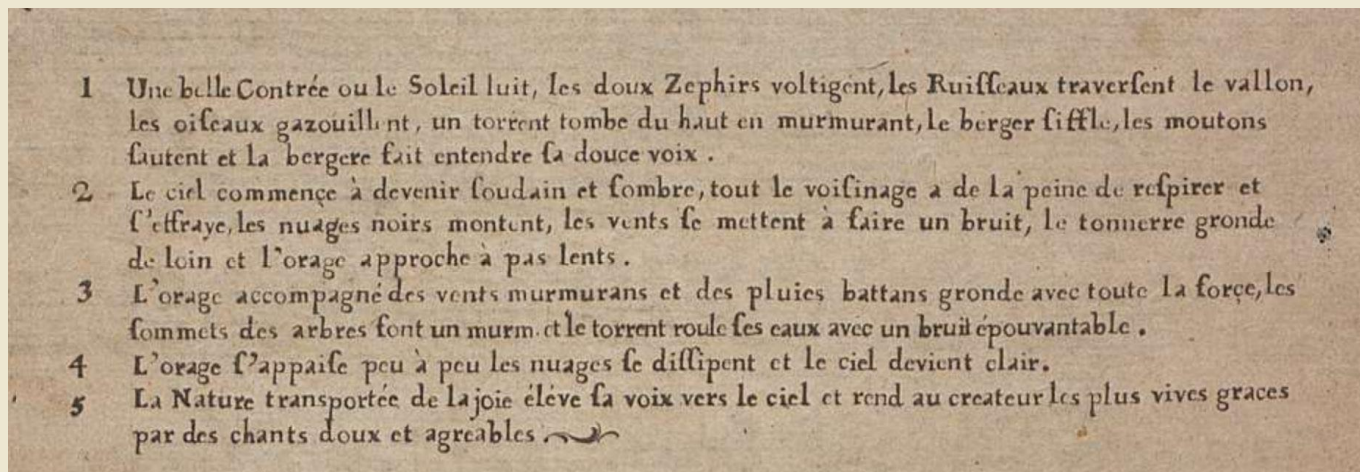
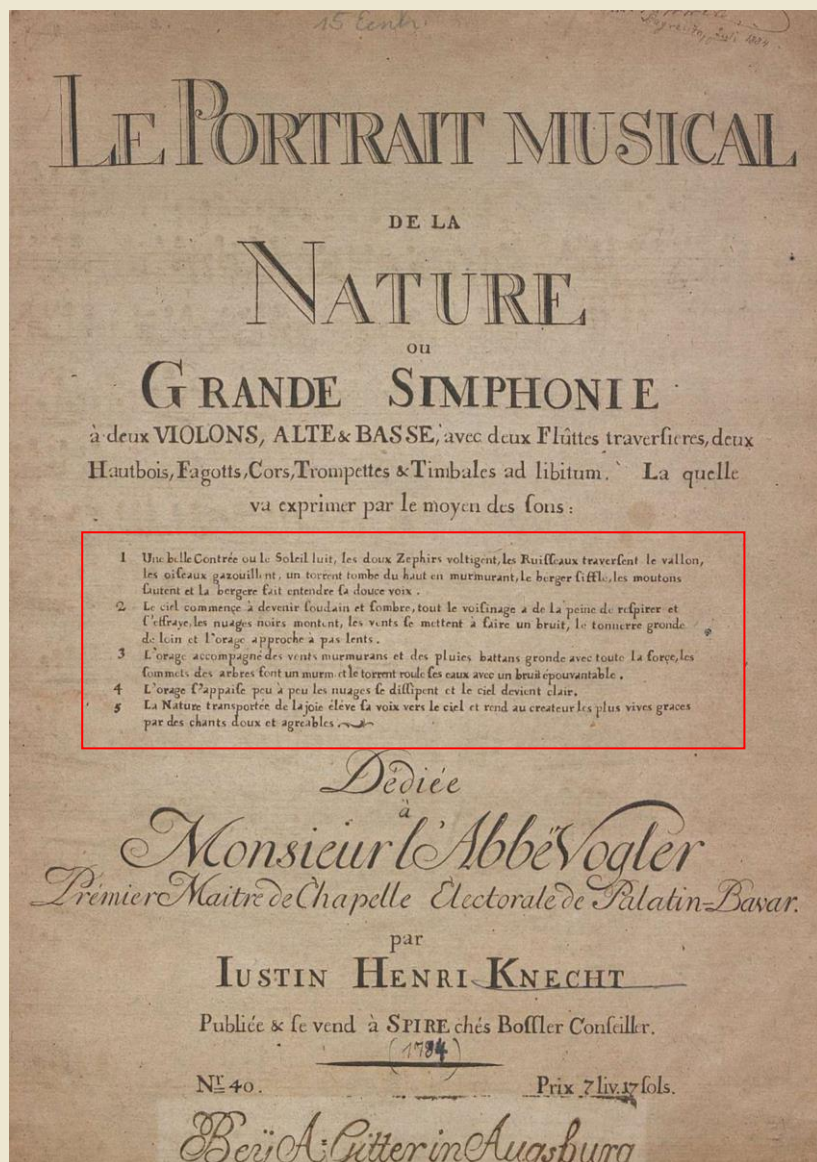
今回演奏するベートーヴェンの「交響曲第6番」は1808年に作られました。そこには彼自身が「田園交響曲あるいは田舎での生活の思い出（音画よりも感情の表現）」というサブタイトルを付けています。さらにそれぞれの楽章にも具体的なタイトルが付けられています。それは、ベーレンライター版ではもちろんこのような「本来の」表記になっています。

1. 田舎に到着した時に人の心に目覚める愉快で明るい感情
2. 小川のほとりの情景
3. 田舎の人々の楽しい集い
4. 雷鳴。嵐
5. 牧人の歌。嵐の後の、神への感謝と一緒に
なった慈悲深い気持ち

このことから、この作品はベートーヴェンにしては珍しい「描写音楽」として位置づけられることもあります。実際、彼がおそらく参考にしたであろう作品もいくつか存在しています。

そのうちのひとつが、1752年にドイツで生まれた作曲家、ユスティン・ハインリヒ・クネヒトが1783年に作った「自然の音楽による描写、あるいは大交響曲」という5つの楽章からできている交響曲です。

これが1785年に出版されたその印刷楽譜の表紙。そこにそれぞれの楽章のタイトルがフランス語で記されていますね（赤枠の中）。その部分を拡大してみると、楽章がベートーヴェンと同じく5つあることがわかります。



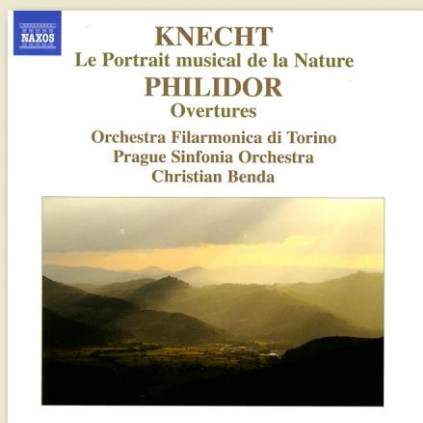
これを訳すと。

- 1.美しい田舎、そこでは太陽は輝き、優しい東風はそよぎ、谷間に小川は流れ、鳥がさえずる。急流は音を立てて流れ落ち、羊飼いは笛を吹き、羊たちは跳びはね、羊飼いの女が美しい声で歌を歌う。
- 2.突然空が暗くなり、あたりの自然は不安に息をのむ。黒い雲が集まり、風が吹き始め、遠くでは雷鳴がとどろき、嵐がゆっくりと近づいてくる。
- 3.嵐は全ての力で襲いかかり、風はごうごうとうなり、雨は叩きつけ、木々の先端は音を立て、急流の水は轟音をあげながら溢れかえる。
- 4.嵐は次第におさまり、雲は消え、空は晴れ渡る。
- 5.自然は喜びに満ち、天に向かって声を張り上げる。それは、創造主への心からの感謝を捧げる甘く心地よい歌だ。

どうです。クネヒトの第1楽章とベートーヴェンの第1楽章から第3楽章、そしてクネヒトの第2楽章から第4楽章とベートーヴェンの第4楽章、そしてともに第5楽章はそれぞれ見事に対応していますね。



CARUS/83.228
(1997)



NAXOS/8.573066
(2013)



HARMONIA MUNDI/HMM 902425
(2019)

この作品は、ごく最近まで録音されたものがありませんでした。初めて録音されたのは1997年ですが、それは2011年までリリースされなかったため、世の中の人々が実際にその音を聴くことが出来るようになったのはそれ以降のことになります。

その後、2013年と2019年に新しい録音に加わり、現在では3種類の録音を聴くことが出来ます。

お勧めは最も新しいフォルク指揮のHARMONIA MUNDI盤でしょうか。こちらはなんとベートーヴェンの「田園」とカップリングされていますし。

最新の研究によれば、ベートーヴェンがこのクネヒトの曲のことを知っていたのはほぼ確実なのだそうです。実際、終楽章のテキストの「創造主への心からの感謝」というフレーズは、ベーレンライター版で明らかになったベートーヴェンの曲の本来のタイトルからの「神への感謝」としっかり呼応しています。そこには、単なる自然の絵画的な描写ではなく、自然を前にした時の感情の表現を目指す同じ視点を感じることはできないでしょうか。ただ、音楽的には、時代様式も異なりますし、ベートーヴェンがクネヒトから直接的な影響を受けているとは考えられないでしょうね。というよりは、「田園」を作った時のベートーヴェンは、クネヒトと酷似したテキストを使って、「自然を前に感動した人間の気持ち（土田）」を、より完成度の高い音楽として表現しようとしていたのではないのでしょうか。